

原始佛教研究の道しるべ (二)

佐々木 現 順

律 従来、我国では律の研究が他の分野ほど行われていなかった。これに比較して欧州に於てはかなり以前より研究せられていた。東洋でもインドに於ては現代でもなお多くの教学が律と関係付けて見られている。この点はヨーロッパの学界とインドのそれと区別することが出来ないほど深い関係を持っている。

その理由はおそらく次のことにもとづくであろう。即ち第一、律はインド古来から伝わったところのインド民族の社会生活をそのまま反映しているから、それによって思想的構築の地盤が現実的に把握出来るという具体性を持っていると考えられたであろう。事実、律に述べられている多くのことは現代インド特に西北、東辺地方では今なお現存しているのである。たとえ学問的興味を離れたみた場合でも、律は一種の現代インドを知るためのガ

イド・ブックともなりうるものである。インド旅行者で少々深くインドを理解したいと思う者ならば何よりも先ず律典の一つをたづさえて渡るべきであると考えている。

第二、欧米及びインド人は具象性を重要視する民族である。我国のように哲学や信仰の違った方面には一向無関心であるというせまい考え方は見られない。彼らに共通の点は社会生活の仕方から具体的なものを学ぼうとすること及び宗教でも文化としてとらえそれを人間形成の糧としようとすることである。彼らには関心 (Interesse) ということが重要であり、同じ関心をいだく者ならたとえ異見を有し、或は相互にパーソナリティーは相反するものであっても相互に結び合う。仲間同志のグループ意識とか意気投合といったことで必ずしも集合はしない。かかる民族性を持てる彼等には、従って、人間共通の場を

叙述するテキストがあれば充分である。それを主観的に好むか否かは問題ではない。かくの如き客観性の重視ということからして、インド人の社会及び個人生活を「生活」という客観的な面で記録された律が興味をそそるであろう。この点は後に述べるアメリカに於ける真言佛教への関心のたかまりの原因にもなっていると考える。

さて律の佛教研究上に於ける位置であるが、律は既に阿育王の頃、成立していたとされる。根本分裂以後の上座・大衆兩派に属する律蔵、更にその後枝末分裂を惹起するに及び各々が自派の律蔵を有し幾分改修もせられた。現存の広律(戒本・經分別・毘度分・附録)は次の六種となっている。

一、Vinayapiaka (南方上座部)、二、十誦律(有部)
三、四分律(法蔵部)、四、摩訶僧祇律(大衆部)、五、弥沙塞和醯五分律(化地部)、六、根本説一切有部毘奈耶(根本有部)

以上の外、一定部派に属する比丘戒本、南方上座部の善見律毘婆沙、或は鼻奈那、毘尼母經、大比丘三千威儀、梵文比丘戒本断簡(有部)等があり、チベット律部に含まれているのは主に根本有部の律典である。

外国文献の中で律全体を初学者向きに書いたものは殆

んど存しないようである。そこでただ特殊研究とみなされているものの中で律の經典的位置をわかり易く書いたものについて以下若干あげておこう。

原始經典に於ける律について最も多くの業績をあげている学者は英国バリー・テキスト・ソサイエティのホーナ博士であろう。The Book of the Discipline 六巻の中で大品・經分別・小品・附録を全訳している。又、Jayawickrama は Samantapāsādikā 序文の英訳 Introduction of Discipline を出してゐる。いずれも PTS 出版であるからバリーの律に関しては先づここからの出版物に注意をするとよい。勿論、原典は PTS 版にもとめた方が学的であるが英訳などは The Vinaya Texts (S. B. E.) などによつてもよからう。更に The Path of Purity (Visuddhimagga) 三巻が P. Maung Tin よつて出版されている。元來、バリー文献は教学と違つて親しみ易く、初学者といえども是非原典の欧訳(又は和訳)を直接みておくことが必要である。即ち研究を始める前にその内容の若干を先づ心得ていることが必要である。次にその内容の經典的な位置付けに進んで行くという研究の歩み方もあるから心がけておくべきであらう。

經典史及び他の文献との関係ということをわかり易く

叙述したものに E. Frauwallner, *The Earliest Vinaya and the Beginnings of Buddhist Literature* がある。本書は阿育王時代の律蔵の成立から有部の所伝律蔵更には佛教教団史まづまづとめられていて便利である。律の概略即ち *Patimokkha-sutta*, *Sutta-vibhanga*, *Bhikkuni-vibhanga*, *Khandhakas* という佛教僧侶の修練の規範及び佛教に於ける当時の教育法などに關しては簡略だが、2500 Years of Buddhism, Indian Government に含まれている一六二—一九四頁の論項を一瞥するとよい。

更に律の語義・原始的 *parivrajaka*、或は基本的な *patimokkha* と僧団の關係等という一般的説明を最初に知っておこうとするならば S. Dutt の *Early Buddhist Monachism*, London, Bombay, 1960 を見るとよい。要領よくまとめた名著であると思う。又、同著書には *Society at the Time of the Buddha*, 1966, Bombay がある。これには appendix が附き原始經典に現われた對話者の吟味及び社会制度、職業、種族の研究がなされている。諸記述は特殊研究に見られるほど深くはないから一般概念の説明として初学者向きであろう。研究の仕方が逆のようであるが、以上のように先づ佛教の律がどんなものかという実体をつかんでおいてか

らそれを問題点として、もう一度インド社会の生活様式を見る。即ち狭きを基本として広い世界を見るという逆の進み方も考えられる。というのはインドという龐大な社会では何かの問題を予め決めてからそれを中心にしてみるのてなければ社会の全貌をつかむということは困難であると思うからである。それは丁度インド旅行と同じで、よく整理された欧米諸国の旅行とは非常な相違がある点である。凡てが雑然としたインドは問題を持たないどこれもこれも疑問だらけになって結局何もとれない結果に終るのである。だから初学者は先づねらいを決めておき、それから徐々に視点を広げて行けばよい。この意味が以上の如き佛教の律の内容を一部分理解しておつてからインド社会規範を見なおすことをすすめたい。この方法に連関して益すると思う文献をあげると N. C. Sen-Gupta; *Sources of Law and Society in Ancient India*, Calcutta University Publication; Hardy, *Eastern Monachism*; Rhys Davids, *Buddhist India* などがある。

大衆の律について既述の N. Dutt, *Aspects of Mahayāna Buddhism and its Relation to Hinayāna*, pp. 290-322 に梵文原典と律に關する主要な概念を若干あげ

て説明しているから一読すべきである。特に著者は原始佛教の専門であるからパーリ諸古典との関係も考慮されているので初学者でも大体の見とおしが出来たであろう。

元来、律 (Vinaya) とは Vinayati から来た語で悪から「離れる」或は「修練する」という義である。漢訳で律、毘尼といわれるが、その正訳を滅又は調伏となしている。更にその義は禁制、罪の軽重を詮量する義である等といわれているものである。因に音訳優婆塞又は梵語 uparaksā であるが、この語もまた漢訳では律と訳されている。ともかく、以上の如き律の原意は原始佛教以来大乘の律の概念にも伝承せられている。原始教団に於てはこの律は pratimoksa なる律令の形で編集せられていた。律に大小乗の区別をして来たのは早くとも紀元四世紀以後だと考えるのであるが、そのことは既に幾多の資料で示されている。紀元後一世紀から四世紀までの大乘典籍で律とか独覺とかが屢々重要視されて出だされる。七世紀の義浄が又、当時でさえ大小二乗が共存して同じ律を実践していたことを記録している。これらの歴史的問題を大小二乗の夾雑性に於てとらえんとする興味を持つものは未開の分野であるという希望を持って進むことが出来よう。かかる広い希望と展望を読者に恵む著書と

し)、Conze, Buddhism をすすめたい。よく熟練した思想表現を用いた英文でもあり、初学者にも読み易いであろう。特に律については本書の二八・五四・一二二・二〇一頁などに注意するとよい。

論 アビダルマは大体西紀前第二世紀頃に経藏より独立して作られたとせられている。現在伝わっているものは北伝有部の諸論書等と南伝上座部の七論である。北伝南伝といふが地域的区別よりも思想及びテキストそのものの区別即ち文献的区別からして北伝をサンスクリット・アビダルマ、南伝をパーリ・アビダルマと呼んだ方が一層適當であろうかと考える。それはともあれサンスクリット文献及びその漢訳所伝のサンスクリット・アビダルマの根本テキストは次の如し。一、集異門足論(二〇卷)、二、法蘊足論(一二卷)、三、施設論(七卷)、四、識身足論(二六卷)、五、界身足論(三卷)、六、品類足論(一八卷)、七、発智論(二〇卷)、更に舍利弗阿毘曇論(三〇卷)、三弥底部(三卷)、四諦論(四卷)等である。パーリ・アビダルマの根本テキストは七論である。一、人施設論、二、界論、三、法聚論、四、分別論、五、雙論、六、発趣論、七、論事である。それぞれにセイロン、ビルマ、タイ、ラオス等の文字による註釈、複註、断簡等多くあ

り、未解の分野であつて研究者の意欲をそそるであらう。ところで研究の状況であるが、昭和の初期頃までは原始佛教といへば阿含・ニカーヤに限られていたが現在及び将来はアビダルマ佛教研究に移る時期であらう。大乘を志す者でも単に般若思想から始めたり、或はその註釈的立場を取つて構築された大乘中観学だけの文献では読者の思弁的要求を満たさないものとなるかも知れない。ただ思想概念の反復に終るざらいが屢々見出される。欧米に於ても漸くアビダルマ佛教が取り上げられて来たがそれは文献の形式に関するもので、教学内容にまで深く入っているものではない。しかし、彼らの大乘研究は常にアビダルマ（南方上座部）の資料を基礎としているから理論も精緻であり、視野も広く、大乘の問題点を適確にとらえている。問題意識を持つことを我々はヨーロッパ学者の大乘研究から最も多く学びうらと思う。大小二乗を分離して来た邦国の一般の風潮は学界にさえ浸透していて現今、見る如く両者を分離した大小乗研究が多いという結果をもたらした。そこでこれから学問しようとする学徒はアビダルマ的思想とヨーロッパの広い視野とを以て臨むことが望まれる。元来、アビダルマとは哲学という意味であり、又、インド文化圏に於て哲学といえ

ば *darśana* である。哲学は宗教と分離されたものではない。インド的に宗教といへばその中心は「直覚」にある。更にインド的直覚とは合理性の限界を越えこそすれ決して合理性と相反するものではない。だから不立文字に終らない。合理的思弁にたえうるものでなければならぬ。その証左はアビダルマ佛教が与えている。むしろアビダルマ佛教では古典的考え方よりは極めて近代的思惟の方向さえ見られる。アビダルマ佛教とギリシア哲学とその考え方及び分析の方法論は極似しているといふことさえ出来る。漠然とした近代哲学のとらえ方で以て大乘佛教を眺めたり、或は両者を比較したりする研究方法論は既に古く啓蒙時代の所産でないかと思う。今なおこうした啓蒙期を必要とする国はインドの知的階級であるが我々はそれは少くとも実質的研究といふことは出来ないと考えらる。論ずることは必ずしも困難ではない。重要なことは実証的資料を与えることであらう。欧米を中心とする実証哲学が現代の思想を特色付けているとするならば、そのことは既に佛数研究に於てもなされつつあることであつたのであり、今更、珍らしい近代の特色ではない。それに答えてくれるものがアビダルマ佛教の研究であると信ずる。この佛教に於ては古典語・現代語の

知識から始めて、我々が阿含・ニカーヤ研究で満たされなかつたところの思索と強靱なる論理的・一貫性への要求が満たされるであろう。

西洋哲学の問題意識を以てアビダルマ佛教入門を志す者ならば西洋思想と比較している論著書を見ることである。しかし、この方面の研究では極めてすくない。二、三をあげると Smart, *Doctrine and Argument in Indian Philosophy* の中の pp. 33-61 ; pp. 89-96 ; pp. 125-145 ; pp. 170-180 がある。この著は必ずしもアビダルマに限られていないが、佛教思想を西洋及びインド哲学と比較し、佛教の問題点がどこにあるかということを広い視野で覚知せしめるであろう。特に認識論的叙述 (pp. 170-180) は、アビダルマ思想の歴史的特色の一つを以て認識論であるとする立場からみて、極めて教示するところがある。テキストを読んでよくこなされた著書でこれは著書 Smart の *nature product* ということが出来よう。一読をすすめたい。インド人学者のものもあるが先述した如く、啓蒙的なもので東西思想をパラレルに並列した感があり、いずれの思想もつかみ難いものが多く、ただ西洋思想もインド哲学の中に既に見られていたといったことを読者に啓蒙しているに過ぎないものがかなり存す

る。アビダルマについては Murti, *The Central Philosophy of Buddhism* など名著だが方法論的にはやはり以上の部類に属する。そこには佛教思想家の時代を無視してただ思想を追っていたり、西洋哲学者の所言の引用とつき合せたりしているのをみるところもある。この点で、これは現代インドの一部を代表する方法論であるといつてよい。こうした種類のものの一層一般通俗化せられた形はセイロンより出版せられる諸種の小冊子に極めて多く見られる。

入門はアビダルマに限らないが、初学者は先づ自分の関心を持てる範囲が如何なる原典を材料としているかということを知っておくとよい。そのために便利な便覧は *A Critical Pali Dictionary*, Copenhagen, *Epilegomena To Vol. I*, 1948, pp. 37-69 である。アビダルマ資料は pp. 47-51 に出ている。これは既刊原典のみならず、写本類及び欧米訳書も掲載しているから自分の関心の領域を知り且つそれを越えた分野についてかりそめの所言を述べるべきでないという学的良心を謙虚に把えることにも役立つであろう。その写しをとって机上におくとよい。入門は原典の中ではアムルッタの *Abhidhammattha-sangaha* であるが、これは現在東南アジアで用いられる

最も基本的教科書となっている。日本ではパーリ語原典だけで了解し難いと思うからそれを解説したものがよい。それには英訳 S. Z. Aung, *Compendium of Philosophy*, PTS, 1910, 独訳 Govinda, *Abhidhammatthasangaha*, 1931 がある。

龐大なアビダルマを全般的に解説するということは至難であるので入門といってもやはり限定された特殊問題に関する著或は一面的著作しか出ていない。入門書はセイロンから出版されているものが多い。その中で比較的現代人にわかり易い視点から書かれているものに *Nyanaponika, Abhidhamma Studies*, Kandy, 1965 がある。又、パーリ・アビダルマ各論書の概説という形で入門を書いたのが *Nyanatiloka, Guide through the Abhidhamma-Pitaka*, Colombo, 1957 がある。該書の appendix, *Paticca-Samuppada* は基礎的なもので要領をえているから特に一読をすすめたい。

佛教と西洋哲学とをつぎ合せたようなものは外国のアビダルマ佛教研究者の中にも見られる。かかる仕方をとる者の書かれたものに Guenther, *Philosophy and Psychology in the Abhidharma* がある。もし若い学徒にして自分の持っている西洋哲学的関心からアビダルマ佛

教に近付きたいと思う者があれば、眺めておく程度に手にしてもよい。併し該書に附いている心理論の図解(Tables) は入門者にとって便利である。ともかく本格的なもの乃至正当な路線は依然として原典或はその翻訳が最もよい。原典研究に熟達した著者で而も西洋哲学的分析を与えたものがあれば一番望むところである。元来、現代人の教育は西洋的な発想と疑問の投げかけをもたらしたと考えるが、よく聞いてみるとその発想や疑問は決して新しいものではなく、原始的人間の持っていた疑問か或は既に古典の中で問いつくされたものかいづれかであるということが最近最も多い。要するに原始民族の或は若い時代に誰でも一応は懐く疑問であり発想法であり奇異とするに足りないものが極めて多い。古典や歴史の上で思想をたどっている者にとっては余程でないとその領域を越えた疑問や発想に行きあたらない。凡そ古典とはいつも古いものであると同時に新しいものでもあるからである。アビダルマ古典がよくそれを物語っているであろう。

ともあれ原典をふまえて而も西洋哲学的アプローチを採用しつつアビダルマ佛教を解説しているものとして Govinda, *The Psychological Attitude of Early Bud-*

dhist Philosophy, London, 1961) をすすめた。特に本書の pp. 77-87 は誰でも一応懐く主観・客観の關係についての問題意識を以てかかっているから初学者には理解し易い。表面には西洋哲学的カテゴリーを出していないが分析的方法と問題意識は常にそれを基礎としていると思われる。

アビダルマ各部派の思想を一般的に知りたいたいと思えば古くが Walliser, Die Sekten des alten Buddhismus, Heidelberg, 1927 がよい。著者は現象学派の哲学者であったからその数多くの作品は方法的にし、かりたものである。ただ今から見れば文献学的資料に欠けるところがあるが中心思想のとらえ方に於て学ぶべきものが多い。彼の作品は現今余り読まれないが思想的関心を持つる者ならばやはり手にしてかかる誠実な研究に触れておくべきであろうと思う。Walliser のものの中で、思维的の進め方という点でかなり時間をかけて目を通しておいてもよい著者として Die Philosophie des alteren Buddhismus がある。又、アビダルマ佛教は必ずしもこれらの著書によって展開する認識論・实在論に限られているものではなく、精神論・禅的なものの実践をもふくむ。併し、原典では詳しい解説はなく、単なる分類に終

っているかの如く感ぜられ、不満に思ふ者は次の二、三の解説書が有益である。即ち Heiler, Die buddhistische Versenkung, München, 1922; Thomas, The Quest of Enlightenment, "The Wisdom of the East Series," London, 1950 などである。又、教義の入門書ではないが若しアビダルマ佛教を抽象的な精神論でなく、具体的に精神物理的要求を以て、それは何を如何に与えているかという観点から注意したかと思ふならば Soma bhikkhu, The Way of Mindfulness, Colombo, 1949; Nyānaponika, The Heart of Buddhist Meditation, Colombo, 1954 をすすめる。ここに出される心理的諸概念を chart にして説明しているものがセイロンから多く出される。Dharmasena, Aids to the Abhidhamma Philosophy, Kandy その一つであり、Buddhist Publication Society, Kandy より入手出来る。こうしたものは俱舍論研究分野ですら日本には作られていない。曾って私が或る米国人にすすめて、彼がここに書かれた四念処を実行して精神錯乱より救われたと感謝されたエピソードもある。ともかく、現在東南アジアで実践されている身心練磨の資料である。

以上述べたことは第一、一般的思想(西洋哲学)は啓

蒙的にかなり常識化されているから、それに影響せられた初学者がどんなものに先づ近づくかということ述べた。第二、それを通して佛教的なものがどの領域におかれているかということにおぼろげ乍ら気付いた初学者が手にはじめてよいところの参考文献をあげてみた。

この二つの型に通じて心がけておかねばならないことは歴史的背景を知ること及び佛教的な問題を具体的に知っておくことである。先づ前者の人にとって歴史的背景を知るために一、二の権威ある綱要書をあげておこう。

即ち B. C. Law, *On the Chronicles of Ceylon*, RASB, Monograph Series, Vol. III, 1947; Adikaram, *Early History of Buddhism in Ceylon*, Colombo, 1953 (Sec. Impression) である。パーリ・アビダルマ佛教の中心は佛音の註釈書が最も資料を多く持っているから佛音の伝記・著作集の説明を見ておかねばならない。そのためには B. C. Law, *Buddhaghosa*, BRAS, Monograph No. 1, Bombay, 1946 がよい。これらは凡て七十頁―百頁位の量だからファックス・コピーでもして手もとにおくことが容易である。なお佛音の伝記については拙著『佛教心理学の研究』（再版一九七二・東京・九九―一五頁）に諸文献をあげておいたから参照を乞う。次に後者即ち佛

教的なるものを具体的問題について眺めたいと考える者には B. C. Law, *Concepts of Buddhism*, Leiden, 1937 などをすすめたい。併しこれは佛教独自の概念を基礎資料とした理解である。アビダルマ思想研究はインドでは余り盛んではない。インドの状況は東南アジアに於けるパーリ・アビダルマ研究の状態と非常に違っているためでもあろう。即ちインドではヴェダ・インテリズムなどの思想が中心であった。特にアビダルマという特殊な而も時間をかけねばならないところの精密な研究は誠になし難い状況である。又、ヨーロッパに於ける如く、インドは強い個性を持った豊かな自由研究をなしうる環境とも違ふ。こうしたことが自づと斯学のアカデミックな育成をさまたげている。一般的に言って、この点、民族性・大学・国土・一般の知的水準などという外的諸要素が個人研究に如何に大きな影響を与えるものであるかをつくづく思う。佛教学遂行のためにはその大学や研究所自体が永いアカデミックな伝統と若い創造力を持つ学徒を多くそばにおくことが不可欠の基本条件であると考ええる。

蔵外 如上の三蔵はパーリ文献としてまとまって最も多く保存せられたものである。蔵外とはそれ以外のもの及びその後期のものを言い、註釈類もその中に入る。

non-Canonical Texts」と言われる部類をなすことにする。

それらは *Milindapanha*, *Nettipakarāṇa*, *Jātaka*, *Apādāna*, *Dhammapāda*, *Mahāvamsa*, *Cūlavamsa* 及び三蔵の註釈書更に文法書などを入れることが出来る。サンسكريットでは *Mahāvastu*, *Lalitavistara*, *Jātaka-māla*, *Buddhacarita*, *Saundarānanda*, *Avadāna Literature*, *Udanavarga* などである。この蔵外(雑部)の研究にはヨーロッパ人が多く関心を持っていることは彼等が律に興味を持っていることと同じであって日本に於ける学界の状況とかなり相違している。

インドに於ける佛教原典は僧院などに限られて保存せられていたなどの歴史的事情によってインド発見というのは殆んどない。ただ *Mañjuśrīmūlakalpa* ぐらいであるとせられている。原典の多くはセイロン・ビルマ・タイ・ネパール・中央アジア問題(帰依・生れ・縁起・波羅蜜等)を佛教的仕方 で取扱っている。何が一体、佛教的仕方かといえば、既述の如き手順をふみ、その著作に目を通した者ならばほぼ直覚しうるのであろう。かかる佛教的領域内に限られた諸問題は P.T.S の *Journal* の中にも数多く出ている。卒論やレポートを作る学生には一応便利であるから参照しておくといよい。

北伝アビダルマに関してはヨーロッパ人の研究は極めてすくない。彼等は主としてパーリー・アビダルマを中心としているがそれは北伝にサンسكريット原典がまれであること及びチベットと漢訳典籍でしか伝わっていないことに原因があると思われる。従って、必ずしも入門と言えないまでも専門書の中で必要な箇所を謄写して集めておくように心掛けるべきであろう。例えば部派研究の權威ある書 *A. Baruan, Les Sectes bouddhiques du petit Véhicule, Saigon, 1955* の pp. 15-25; *Appendice pp. 260-295* などがあり、雑然としたところの入門程度の知識を集約せしめるに役立つ。

北伝アビダルマの教義に関しては古くから今なお用いられているものに *Rosenberg, Die Philosophie des Buddhismus* がある。本書は俱舍論の教義を分析したもので極めて解り易く、又、内容理解を助けるものとして未だ本書に及ぶ著書を見ない。ただ資料は既に古いものであることとその後学問的分野が広がったことからして文献学的意味は減じている。日本古来の伝統的資料だけによる分析ではあるが思想把握のためには日本に於ける解説者より一層理解し易いから一読をすすめたい。かかる内容理解とは別に經典史的立場から北伝アビダルマ

をまともに研究対象に選り始めた傾向がヨーロッパに現われ出した。例えば Frauwallner, Abhidharma-Studien, WZKSO, VIII, 1964 の如き論文である。北伝アビダルマ七論の歴史と組織とを書いたものである。この段階ではまだ日本に知られている以上の内容にはなっていないが今後続篇が期待せられる。入門的知識のためならばその限り有益である。

なお教義に関する紹介論文・著書としてインド出版のものも若干ある。ベナレスの Kaseen 或はサンチネーターン大学の Aiyaswami などの論項もあるがこれらの学者は漢訳論蔵による教義の理解が充分とは言えない。殆んどは乏しい梵文やその断簡ギルギット等のインド外の佛教国で発見せられたものである。而も発見者はヨーロッパ人が多く、又、それらの未出版の断簡は今なおヨーロッパに保存されているためヨーロッパ人が蔵外の研究に特に関心を持っている。又、宗教の違う欧米人にとって佛教は文化的資料でしかなく、人生哲学を必要としないため哲学思想まで深く立ち入ることもしないのであると思う。佛教の哲学思想となればヨーロッパではむしろ佛教学者以外の哲学・宗教学者によって維持せられている。この点、日本と非常に違っていると思われる。

これらの蔵外は今後研究するための宝庫であるといつてよい。研究には諸種の方法があろうが原始經典を中心とした立場からして次のような方法もありうるだろう。

即ち言語学上、これらの資料にはペーリ語・梵語・佛敎梵語・フラクリット等の形態が多く残されている。又、言語の表現法の発展が見られる。かかる言語学的アプローチも興味をそえる。特に大乘思想への傾向をたどろうとする場合、ペーリ語の本来的有する諸義が漸時、限定せられ又、改変せられ、固定せられて行く過程が論証出来る。この改変或は意味の限定は場合により大乘佛敎思想解釈の固定化・形式化という結果をもたらすに至る。併し諸言語の dynamisch な意味を予め知っておれば、一見、固定化せられた如く見える梵文經論の中に深くせまり得るし、又、その生きた意味をつかみとることも出来る。従つて、固定化された解釈が誤解であったという新しい発見が出てくる。これは研究法の一例であるが、蔵外はまとまった思想だけを求める者にとっては興味うすいかも知れないが、思想体系は一応別として型態・言語等の研究に集中すればそこから自づと思想も適確な仕方で見られる。先づ原典を一つつかまえておく。他の興味が多く起つてもまたその原典へ帰つて行くという研究態度が

初歩者にも望まれる。そのために適当な指導者から原典を一つ与えてもらうということも出来る。その原典に自分が思想的興味を持つかどうかは研究という名のつく仕事の上ではさしたる問題ではないと思う。ヨーロッパの若い学徒らの歩み方はそのようなものである。ほんとうの興味というものは実物がなければ湧かないものである。実物なくして莫然とした感情、或は幻の如き fiction からは真の興味も湧くまい。研究には常に現実的実物をつかみとらねばならないという実証的精神が必要である。単なる自分の興味という小我からぬけ出ることを必要とする。こういう態度こそ大学に於て学びとらねばならないところのものではないであろうか。かかる原点に立ち帰った態度こそ原始佛教の教えるところのものである。正しい批判精神と確固たる自信は先づ実物を我が前に持つということからでないとはんものではない。又、思想家がいかなる allegorical sense を引き出しても、彼がテキストの literal sense も知らずしてこれをなせばそれは学問ではないということも知るべきであろう。

むすび

幸い原始佛教研究は、国際的に広がっている研究であ

る。曾っての如くヨーロッパやインド或は日本人の一部だけに限られたものではなくなつた。アメリカという新しい国でさえ最近とみに原始佛教が注目せられて来た。而も教理や原典研究のみにたずさわっていた従来の研究分野を出て社会問題など生きた研究が注意されて来た。例えば本年度(1971)にハーバード大学で行われた American Oriental Society 百八十一回の学会でも「パリー文献に於ける血族結婚」、「上座部の佛陀論」、「原始佛徒の改宗者」といった研究発表があり、新しい観点でも原始佛教資料が用いられるに至つた。これはアメリカで従来見られなかつた傾向である。このようにして、原始佛教研究は最も国際的に広範囲の生きた学問である。又、その資料の殆んどが欧米・インドの資料であるから語学も上達し、又、学界の交流も相手が諸外国人であるという点で広い視野にも立てる。即ちこの研究を通じて現代の欧米語の訓練も出来るし、それらに慣れてくるという諸功德が自づと恵与せられる。つまり最も古い原始佛教研究によって最も新しいセンスが養われるというわけである(一九七一・四・二)。